レッスン：23“M”

テーマ：黙想と瞑想（Contemplation and Meditation)

MAC23.DOC.ENM/KE3

私の兄弟・姉妹たち、

スピリット、光、火の子供達よ。私達は常に主、絶対、聖なるものに抱かれています。

　　私達が黙想すると言う時、実際に何をしているのでしょうか？黙想はマインドの波動の中で表現されるのでしょうか？黙想にはマインドのいかなる波動が必要なのでしょうか？

　　黙想、正しい思考、想念・思考という現れ、感情・気持という現れがあります。現在のパーソナリティーとして、私達は何を現わしているのでしょうか？以前、私達が現わすものは全て思考・行動の仕方の結果であり、その思考・行動の仕方は気づきのレベルの結果である、と述べました。

　　現在のパーソナリティーは思考・行動の仕方としてのこの現れを表現するために、実際に何を使っているのでしょうか？以前のレッスンでマインドについて述べ、全てはマインドであり、マインドを通じて存在する。マインドから（from)ではなく、マインドを通じて（through)である、と述べました。それゆえ、

マインドを通じて、存在の諸世界にはLifeの現れがあり、実存の諸世界にはLifeの現象の現れがあるのです。

　　私達は思考・行動の仕方としての現れ、思考としての現れ、欲求としての現れを現わすためにマインドを使います。

私達が現わす結果として、私達の思考・行動の仕方の結果として、私達はエレメンタルの群れを創造します。

そして、無知の中にある間は、私達は欲望・想念のエレメンタルを創造します。そのようなエレメンタルを創造するためには、マインドのどのような波動を使うのでしょうか？サブスタンスと超物質を使います。しかし、同時に物質をも使います。なぜなら、私達は物質の中に生きているのみならず、物質をまとっているからです。従って、粗雑な3次元世界の中で自分自身を表現するために、私達は三つの異なった波動のマインドを自由に使っているのです。

欲望想念のエレメンタルを創造しながら、これらの波動、これらの諸世界の中で黙想が可能でしょうか？

成長を通じて、気づきの上昇を通じて、超物質よりもサブスタンスの方をより多く使うことによって、人間は徐々に時々、想念欲望を創造し始めるようになります。

その時初めて、その人間は時々何らかの形の正しい思考を表現している、と言うことができるのです。

真理の探究者として私達は、どのようなものを、様々なレベルの正しい思考とみなすのでしょうか？

正しい思考は、人間が自分の諸体を支配している時にのみ表現可能です。現在のパーソナリティーの諸体の不定形な形を完全に再形成した時はじめて、その人間は正しい思考を現わす、作りだすエレメンタルの基盤としてサブスタンスのみを使用している、と言うことができます。

しかし、それらのエレメンタルはサブスタンスだけをまとっているのでしょうか、あるいは超物質をもまとっているのでしょうか？さらには、それらのエレメンタルは物質の中で表現されることもできるのでしょうか？答えはイエスですが、しかしスパーク、つまりスタートのポイントはサブスタンスによっています。

人間は実存の諸世界にいる間、正しい思考以上の何かを現わすことができるのでしょうか？答えはまたもやイエスです。

しかし、人間が表現することができるその“何か”は、何の結果なのでしょうか？それはいわゆる超意識の意識であるセルフ・エピグノシスの結果であり、その結果として人間はスーパーサブスタンスの使用を通じていわゆる黙想を現わすことができるのです。

スーパーサブスタンスは、高次ノエティカルおよび明確な形のない諸世界において使用される波動のマインドです。しかし、それらは依然として実存の諸世界の波動であり、存在の諸世界の波動ではありません。それらは現在のパーソナリティーの諸世界であり、従って魂のセルフ・エピグノシスはまだ完全には表現されていません。

page2

　　そうです、正しい思考と呼ばれる段階を通過した時にはじめて、現在のパーソナリティーは黙想を現すことができるのであり、それ以降そのパーソナリティーが表現するものは全て、実存の諸世界の中に存在する原因・結果の法則と完全に同調しています。

質的にそのレベルから表現されるものは全て、その人の真の本質以外の何ものでもありません。

人間が超意識的意識のセルフ・エピグノシスの最後の段階に到達した時はじめて、黙想を表現することが可能です。

というのは、超意識の意識のセルフ・エピグノシスには様々な段階があるからです。“超意識的意識のセルフ・エピグノシスの最終ポイント”とはどういう意味でしょうか？それは、その人にとって実存の諸世界の中でそれ以上成長すべき段階がもはやない、という意味です。

しかし、奉仕し、同胞の全ての人間を助け、神の愛を伝えるために、その人は引き続きそれらの（＊実存の）諸世界の中でパーソナリティーとして現れます。

　　人間の黙想は魂のセルフ・エピグノシスの黙想と等しいのでしょうか？イエスであり、またノーでもあります。質的には非常に似通っていますが、その質においてもいくらかの違いがあります。なぜなら、人間の黙想は、現わすためにかなり低い波動のマインドを用いるからです。現在のパーソナリティーの超意識的意識のセルフ・エピグノシスがあるのですが、しかし魂のセルフ・エピグノシスは魂の意識によって特徴づけられ、魂の意識は現在のパーソナリティーの意識よりも遥かに高い意識だからです。

超意識的意識のセルフ・エピグノシスの黙想を絶対存在の絶対的黙想と比較できるでしょうか？いいえ、そこには比較はありません。

　　魂のセルフ・エピグノシスの黙想を絶対存在の黙想と比較できるでしょうか？ある程度まではイエスと言えます。というのは、質的には似ているからです。しかし、量的には違います。従って、総体としては、魂のセルフ・エピグノシスの黙想は絶対存在の神の黙想、つまり絶対的黙想と非常に似ています。

　　私達の兄弟であるアークエンジェルたちはどのような黙想を現すのでしょうか？彼らは人間と似たような黙想を表現するのでしょうか？また、人間と言う場合、その中には魂のセルフ・エピグノシスも含まれるのでしょうか？なぜなら、魂のセルフ・エピグノシスは人間のイデア、創造界におけるロゴス的現れの結果だからです。

　　そうです、黙想は絶対存在の本質に含まれる特質です。なぜなら、創造界全体は、アウタルキーの中での神の黙想の活動(movement)の結果だからであり、それゆえ、その活動の結果として創造界があるのです。創造界の中にあるものは全て、神の黙想の中にあるのです。

　　アークエンジェルはロゴス的現れと同じような仕方で黙想するのでしょうか？以前のレッスンで、ロゴスの下降において、セルフ・エピグノシスは一つであるが、意識の制限の結果としてそれは様々なレベルにある、と述べました。アークエンジェルの意識はひとつですが、創造界における彼らの奉仕の目的と役割は各アークエンジェルのオーダー（＊グループ）によって異なるので、様々なプログラミングがあります。

　　それらのアークエンジェルのオーダーはどのような類の黙想を現すのでしょうか？神の絶対的黙想と似たような黙想を現わすのでしょうか？彼らは神の黙想の道具であり、神の黙想に奉仕しており、彼ら自身が黙想するということは問題ではありません。彼らは（＊神と）異なって黙想するわけではありません。なぜなら、アークエンジェルが表現するものは全て神の黙想であり、彼らは手段、道具として神の黙想の現われに奉仕しているのです。

ですから、神の絶対的黙想、つまり絶対存在の黙想があります；私達の魂のセルフ・エピグノシスの黙想があり、そして私達の兄弟であるアークエンジェルたちは神の黙想の中で奉仕しています。諸世界の中でモナド（＊モナドとは単体、個体という意味）として（つまり、全体とは別に）黙想するためには、セルフ・モナド（＊単体である自己）として現れることのできる能力、という質が求められます。その質とはセルフ・エピグノシスと呼ばれるものであり、それはロゴス的現れにのみある特質であって、聖霊的現れの特質ではありません。それは意識の特質ではなく、セルフ・エピグノシスの特質なのです。

さらに、超意識的意識のセルフ・エピグノシスの黙想もありますが、それは自分の諸体を完全に支配できるレベルに到達した現在のパーソナリティーが現します。

正しい思考の現れがあり、想念欲望のエレメンタルの創造があり、欲望想念のエレメンタルの創造があり、無知の中に完全に閉じ込められている現れもあります。

page3

　　これらの波動（＊粗雑な物質界）の中に最初に生まれてくる時、そのパーソナリティーはどのような類のエレメンタルを創造するでしょうか、またどのような類の欲望を表現するでしょうか？本能的な表現であり、動物が表現するものとそれほど違わないように見えます。しかし、それにもかかわらず違いがあります。なぜなら、その本能的表現にはセルフ・エピグノシスが伴っているからです。このセルフ・エピグノシスは徐々にその特定のパーソナリティーに二元性を現します。しかし、動物のグループを担当するアークエンジェルが放射する本能としての二元性ではありません。人間は比較・観察を始めるようになります。もちろん、初めは全て本能から出てきますが、徐々に、ゆっくりと観察と比較を通じて思考が始まります。ギリシャ語には、私達が言う“瞑想”(meditation)を意味する“syllogismos”という言葉があります。

実際、黙想（contemplation) は瞑想(meditation) 以上のものです。それはずっと高い状態を意味し、大ざっぱに言えば、＜ひとつにまとめる、内なる“神殿”　(temple)から見る＞というような意味です。私達のレッスンでは、“絶対”に関しては常に黙想という言葉を使い、瞑想とは言いません。実存の諸世界の人間に関しては私達は瞑想という言葉を用いますが、それは＜検討する、それについて考える＞という意味です。

瞑想とは、意識であるセルフ・エピグノシス(consciousness Self-Epignosis)の時間・空間の意味内における動きです。ギリシャ語では“syllogismos”と言い、瞑想の意です。

質問：人間がその内なる本質、アークエンジェル的本質を現わす時、その人は絶対存在の黙想を現わすことができないのですか？

K：人間のアークエンジェル的本質ですって？ありえません。魂のセルフ・エピグノシスでさえ、アークエンジェル的本質を表現することはありません。私達がある特定のレベルに到達した時、つまり諸体を支配、コントロールするレベルに到達した後に私達が表現するものは、いわゆるアークエンジェル的ヒポスタシス(＊状態、存在）であって、アークエンジェル的本質ではありません。

質問：それでは私達がアークエンジェル的ヒポスタシスを現わす時、絶対存在の黙想を現わしているアークエンジェルと人間のアークエンジェル的ヒポスタシスの表現の間には違いがあるのですか？

K：ある意味では違いはありません。なぜなら、人間は兄弟であるアークエンジェル達と協力して働き、創造界において奉仕することが可能だからです。他方、アークエンジェル的ヒポスタシスを表現している人間とアークエンジェルとの間には大きな違いがあります。人間はアークエンジェルの全てのオーダーの、あらゆるプログラムされたセルフ・エピグノシスを表現することができます。さらに、特定の個人に向けて愛を送り、その特定の現れを抱擁することができます。無知の中、善悪の意味の中、苦しみという意味の中にいる同胞の人間が受け入れられるような形で愛を送ることができます。その時初めて苦しみは、現在のパーソナリティーとしてのモナド・セルフ、あるいは自己実現している時には魂のセルフ・エピグノシスとしてのモナド・セルフから手を差し伸べて貰えるのです。それが自己実現のために私達が創造界に下降してくる唯一の理由です。それは個別性(individuality) の結果として達成され、その個別性はパーソナリティーが経る経験の結果として表現されるのです。

質問：それはつまり、いまだ実存の諸世界にいる間に、自らの個別性を得ることができるという意味ですか？

K：そうです、しかし、いかなる類の個別性でしょうか？現在のパーソナリティーの個別性という意味ではありません。それでは不十分です。

個別性を表現しているそのパーソナリティーは、現在のパーソナリティーの自己実現に到達する必要があります。その時はじめて、現在のパーソナリティーとしてのモナド・セルフは他の同胞の苦しみに手を差し伸べ、創造界において奉仕することができるのです。

神の黙想を現わすというそのレベルに到達する最初の人は、存在の世界に入る最後の人となるでしょう。なぜなら、その人はその特定の惑星上の最後の人間がそのレベルに到達するまで待つからです。その時はじめて、この惑星上の人類全体が存在の世界に入るようになるでしょう。何が、そのパーソナリティーが存在の世界に入るのを止めているのでしょうか？それは同胞の人間たちに対するその人の愛、その人のアガピです。

page4

質問：しかし、彼が実存の諸世界にいる間、彼はアークエンジェル的ヒポスタシスを表現することができます。もし、彼がアークエンジェル的ヒポスタシスを表現することができるなら、彼はまた魂のセルフ・エピグノシスを表現できるのではありませんか？

K：違います。あなたは魂のセルフ・エピグノシスの本質全体を表現することはできません。あなたはあなたの魂のセルフ・エピグノシスの多くの特質を表現していくのです。

質問：もし自分のアークエンジェル的ヒポスタシスを表現することができるのなら、アークエンジェル的ヒポスタシスと魂のセルフ・エピグノシスを表現することとの間の大きな違いとは何なのですか？なぜなら、両方とも神の特質の現れである神の黙想を表現しています。

K：違います。私達がアークエンジェルについて述べた時、彼らは神の黙想における召使い(servant)であると述べました。彼らは仕えているのです。人間が自らの諸体を支配できるレベルに到達し、超意識である意識のセルフ・エピグノシスを表現している時、その時にはその人もまた神の黙想における召使いとなります。しかし、人間の黙想とアークエンジェルの黙想とは同じではありません。なぜなら、今や人間の黙想は二つあるからです。その人は神の黙想の召使いとして神と同調することができ、またその人の個別的黙想もあるからです。これが人間と人間の兄弟であるアークエンジェルとの間の大きな違いです。勿論人間はある程度まで神の黙想であるアークエンジェル的黙想を表現することができます。しかし、人間はそれ全体を表現することはできません。私達が“神の”(divine)と言う時、実際にはそれは正確な用語ではありません；アークエンジェルたちは召使いであり、神の黙想における道具であり、自分自身の黙想を表現することも、また神の黙想とは異なる他のいかなる者の黙想を表現することもありません；アークエンジェルは個人としての黙想を表現することはないのです。

　　次のように説明しましょう。人間は神の黙想において仕え、さらには自分自身の黙想を表現することができます。しかし、魂のセルフ・エピグノシスの黙想はそれより遥かに偉大なものです。なぜなら、それはモナド(Monad) の黙想だからです。あなたはそれらの意味について深く考えてみる必要があります。

　　私達は自分の黙想を絶対存在の創造的黙想と同調させ、召使いとして、兄弟であるアークエンジェルとひとつになることができます。しかし、私達は超意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現している間は、魂のセルフ・エピグノシスとひとつになることはできません。魂のセルフ・エピグノシスの意識はずっと高次なのです；アウタルキーの中のモナド(Monad) はこの現われの道を通過して、イデアとしてのその特定の現れを通じて表現できるもの全てを表現します。これは私達の方が優れているという意味ではありません。差別しているわけではありません。なぜなら、他の全てのモナド(Monads) もまた、もし彼らが願うなら、たとえ彼らが類似の黙想を表現しているにしても、それを達成することができるからです；実際、私達は“願う”という言葉を使うことはできません。なぜなら、それは“願う”というよりむしろ黙想だからです。

質問：私達が同調と同化というような進化・成長のレベルに到達した後、私達は全体として活動するにもかかわらず、個人としてのセルフ・エピグノシスを保つ、と言うのは本当ですか？

K：違います、私達は常に個人として活動します；しかし、二元性の結果として、表現される観察の違いがあり、同調における表現の違いがあり、同化においても大きな違いがあります。全体に同化しても、個別性は失われません。あなたは全体として活動し、全体の中で活動しますが、私達の本質である多様性という特質を表現することができるのです。いわゆる聖なる神的観察を通じて全体の中にあることができますが、しかし同時に、それらの観察を混乱させたり歪めることなしに、無数の観察点があるのです。その人の存在(Beingness)はそれら全ての活動の中、神の黙想の中にあるのです。もはや、意味というものは存在しません。全ては全ての中にあります、その全てが最小あるいは最大と見なされようとも。最大さえも、ひとつの点なのです。

page5

質問：同化の世界にいる人々は実存の世界にいる人々に対して、どのようにして助けを差し伸べるのでしょうか？言い換えれば、同化の中にいる人々は下の方の実存の諸世界には下降しません。それゆえ、彼らはどのような助けを提供できるのでしょうか？

K：私達が同化の諸世界について話すとき、それらの世界は魂のセルフ・エピグノシスとしてのLife、生それ自体であり、現在のパーソナリティーとしてのそれではありません。魂のセルフ・エピグノシスは黙想し、それ自体の微細なスパークがそれ自身の波動を下げて、助けるために実存の諸世界に入ります。

　　しかし、自らの波動を下げることを“欲する”という刺激はどのようにして来るのでしょうか？彼らは神の黙想に仕えており、彼らはその黙想における召使いであり、彼らは神の愛の現れであり、神の愛は神の黙想の活動の中にある全てのものを抱きしめます。彼らは彼らが好むあらゆる所、彼らの黙想がフォーカスするあらゆる所に広がることができます。どのようにしてという問題ではありません。彼らは今や、黙想の中の活動として、あらゆるものを抱きしめる愛なのです。

質問：それはつまり、それらの存在は同調と同化の諸世界の間を自由に動くことができる、という意味ですか？もしそうなら、なぜ最初にそれらのステートをそれほど決定的に分けるのですか？

K：私達が下方にあるこの無知の中にいる時、それらの世界に入ることができるでしょうか？勿論、不可能です。もし私達が低次の波動の中にいるなら、いかにして高次の波動の中で自分自身を表現することができるでしょうか？どのようにするのでしょうか？進化・成長があります。進化・成長を通じて、私達はより高い、そしてさらにより高い波動の中で自分を表現していくのです。私達は二元性から自由になり、同調を表現し、それから同化の中に入るのです。無知の中にいる間は、同化を表現することは全くありません。そうです、無知の中では私達は様々に異なったレベルの同調を表現することができます。無知の中にいる間でさえ、私達は潜在意識のマインドと同調することはできます。しかし、何かと同化することはできません。多くの人々がいろいろなやり方を実修し、それによって花やその他多くのものと同化することができると主張しています。それらはイリュージョンです。達成できるのはある種の同調であり、同化ではありません。

　　同化は、全ては全ての中にある存在の諸世界のものであり、それを現実のものと（realize）しなければならないのです。そうです、全ては全ての中にありますが、それはnon-realizationの状態におけるものです。それは多様性であり、そこでは全ては全ての中にありますが、自己実現した現れがそれを体現するのです；そして勿論、自己実現した唯一の現れとは、転生のサイクルを経たロゴス的現れであり、彼らが自己実現した唯一の現れなのです。

私達は常に主、絶対、主の聖性の中に抱かれています。